

二学期に書いた哲学通信の続きと書いていたのですが、実力と時間の不足で三学期にはまったく書けませんでした。卒業式まであと二日になり、なんとか最後のまとめを出したいと思います。

前回やっとカントまで行きました。デカルトに始まる理性を絶対的な中心に置く考えは、カントを経てドイツの観念論と呼ばれる哲学で絶頂に達します。それを始めたのが、カントの後継者を自認したのがフィヒテ（1762～1814）です。この人はナポレオンに占領されたドイツで、ドイツ民族が民族の誇りを失わないように「ドイツ国民に告ぐ」という演説をしたことで有名です。このフィヒテの後にベルリン大学の哲学の教授として一世を風靡するのがヘーゲル(1770～1831)です。

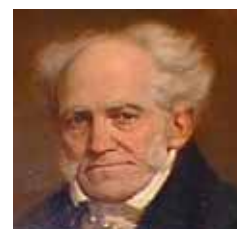
観念論者はカントを一步進めます。カントは、人間の理性は、感性が受け取る様々なデータ（これを「現象」と呼ぶ）を、理性のもつ生まれつきの能力を使って整理することができると言いましたが、その能力は「もの自体」には及ばないとしました。それに対して、観念論は「いや、『もの自体』も整理できる」と主張します。これはどういうことかと言うと、この私たちが「『これは理性にかなっていない』」と思ったら、それは実際に存在するのだ」ということです。ヘーゲルは「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」と言い切りました。もし本当にそうなら、すべては数学のように綺麗に説明できるわけです。が、現実はそうではない。ヘーゲルは自分の哲学で哲学は完成したと豪語しましたが、彼の死後すぐにその弟子たちは二つに分裂しましたし、彼に反対する哲学もどんどん出てきました。

その反対者たちの言い分は、「デカルト以降、理性を神のように見て哲学を作り上げようとしたが、結局わけの分からんことばかりになった。それゆえ、理性は見限って、もう一つの精神的働きである意志を中心に置いたらええんとちゃう」ということでした。実はカントが純粋理性では到達不可能の神や魂などの「もの自体」が、実践理性（道徳に関する理性で、それゆえ意志と密接な関係にある）によって到達できると結論したとき、意志を理性より重要なものとしていたのです。

その一人がキェルケゴール（1813～55）とショーペンハウワー（1788～1860）です。前者はデンマークの人で、当時のなまぬるいデンマークのプロテスタント教会に強く反発し、「キリスト教徒であるとは、イエス・キリストの生に学ぶこと以外にあり得ない」と叫びます。彼に言わせれば、「ヘーゲルは世界の歴史、人類の歴史の全体について壮大な体系を立てたが、そんなことは意味がない。本当に大切なのは『いま、ここ』にある私、君なのだ。私が興味あるのは、何か分からん絶対精神の発展などではなく、一回きりしかない人生をどう生きるかだ」となります。



ショーペンハウワーは別の視点からヘーゲルを嫌いました。彼は当時人気絶頂だったヘーゲルに対抗すべくベルリン大学でヘーゲルと同じ時間に講義をしたのですが、ヘーゲルの教室が満員だったのに対し、彼の教室には猫4匹しか来なかったという屈辱をなめ、また本を書いてもお父さんすら買ってくれなかった（これはスペイン語の誇張表現）そうです。これが原因かどうか知りませんが、彼は次のような厭世的な結論に達します。「世界の本質は盲目的な生きる意志じゃ。しかし、生きるのは苦しみに他ならない。であるから、幸福になるにはこの生きる意志を捨てねばならぬ」と。



ここで注意して欲しいのは、意志とは魂の精神的能力ですが、人間には肉体から生まれる欲求能力

もあります。この二つは密接に結びついていますが、区別されねばなりません。例えば、目の前に美味しい料理があっても、健康上の理由とかで「食べない」と決めることがある。これは「食べたい」と思う肉体的欲求能力に対して、「食べない」という別の意志の力があることを示します。ショーペンハウワーの言う「盲目的な生きる意志」はどうも精神的能力だけではないようです。彼の影響を受けたニーチェ（1844～1900）やフロイト（1856～1939）は肉体的欲求こそ人間の本質だとします。もし肉体的欲求能力を人間の一番大切な能力だと考えるなら、それは人間を動物と同じものにしてしまうことになります。



フロイトは「人間の本質は性欲だ。それは無意識の中に隠れている。それゆえ、それを表に引き出して満たすことが人の成長につながる」と言いました。彼は精神科医で、精神病の原因はこの隠れた欲を無意識に押さえ込むことにあると考えて、それゆえに患者から根掘り葉掘り過去のことを聞き出したり、またはその人が見る夢を分析したりして、無意識の世界に隠されたものを表に出してそれを満たしてやることで病気が治ると主張しました。これを精神分析と言います。現在はこの治療法は否定されていますが、彼の性欲に関する理論は広がったままです。でも、もし彼の理論が正しいなら、性欲に限らず人間の欲求を制御せずにそれを満たすことがその人の成長につながるわけで、それなら子供に対する家庭の躾も教育も意味がなくなる。また、もし人間の本質が無意識の世界にあるなら、「私はいったいどんな人間なの？」ということになるでしょう。

ともかく、19世紀の半ばから、それまでの哲学とは大きく異なる考えが幅をきかせ、哲学は混乱を極めます。そこで20世紀には、それまでの哲学を全部否定しようとする人たちや、「もっと素直に世界を見て、見たままに話をしよう」（フッサールの現象学）という哲学が現れました。他方スコラ哲学やアリストテレスも再び見直されています。ともかく哲学の世界はまだまだ混乱の最中です。

さて、私が本当に大ざっぱですが、西洋の哲学の歴史を説明したかったのは、三つの理由があります。一つは社会に出ると、「がこう言っている」と言って、後生大事に西洋近代の有名な思想家を引いて、自分のたいしたことのない考えに箔をつけようとする人にお目にかかるでしょうが、そういう思想家の名前にびびらずに落ち着いてその正誤を判断して欲しいからです。ここで説明したように、多くの近代の思想家も、鋭い洞察と同時に、本当にけったいな考えを主張する人が多いことを知っておくなら、それに騙される危険が少なくなるのではと思います。

もう一つはものを考える人になって欲しいと望むからです。社会の中では「答えを出せばそれでいい」ではなく、「なぜその答えが出てくるか」の方が大切という場合が多いのですが、その間に答えるためには、普段からものの考え方を身につけようとする必要がある。そのために西洋の哲学者たちは面白い手がかりを与えてくれます。

もう一つは、普段は当たり前になっていること（例えば、ものが存在すること、しかも秩序ある仕方存在すること、外のものを認識できることなどなど）などが、よく考えると不思議なことであるということに気がついて欲しいからです。そうして、この不思議な世界がどうして出来たのか、その中に生きる私たちは何なのかなどの根本的な問題にも興味をもち、人生をより深く生きて欲しいです。

またいつかこのような話しが出来る機会があればと思います。御元気で。